大学野球選手における集団凝集性とコレクティブ・エフィカシーの関連について

～学生野球に着目して～

スポーツ経営組織学ゼミナール 1316021 啓田 勇貴

1.研究動機・研究目的

スポーツにおいて必要な能力には身体的能力と精神的能力が挙げられる。また、集団競技においてパフォーマンスを高める為には、集団全体としての動機づけや心理的要因を高めることが求められる。その中の１つに、集団凝集性が挙げられる。しかしながら集団競技では、個人の成功が必ずしもチームとしての勝利に結び付くとは限らず、選手自らがチーム全体に影響を与え、そのチーム全体から自らも影響を受ける場合がある。

上記のような現象をコレクティブ・エフィカシー（Collective Efficacy: CE）と言い、「チーム内における集団に対する有能感に関しての共有された信念」と定義されている（永尾ら，2010）。同じ野球選手でもポジションの違いによって求められる能力は変わってくる。これまでに野球選手における集団凝集性と CE を用いて、ポジション別に検討した研究は見受けられない。このことから、同じチームで勝利を目指して戦いつつも、ポジションによって求められることが異なることが理解できる。

本研究では、本研究では、大学野球部員（J 大学、K 大学）を対象とし、集団凝集性と心理的パフォーマンス CE の関係性、指導者の違いで集団凝集性と心理的パフォーマンス CE に違いを見られるのかを明らかにすることを目的とした。

2.研究方法

調査期間・対象は、2019 年 10 月 3 日から 10 月 22 日にかけて、J 大学硬式野球部に所属する大学 1 年生から大学 4 年生までの 86 名と K 大学硬式野球部に所属する大学 1 年生から 4 年生までの 73 名を調査対象とした。対象とした大学生 159 名のうち、有効回答数は、148 名（有効回答率 93.1%）であった。

本研究では､質問紙調査を行い､心理的パフォーマンス CE と集団凝集性尺度を使用した。本研究の質問紙は 1.フェイスシート 2.心理的パフォーマンス CE 3.集団凝集性尺度の 3 つの質問内容で構成した。

得られたデータは、統計解析ソフト SPSS version 21 および、Microsoft office Excel を用いて分析を行い、主な分析方法としては、相関分析、t 検定、分散分析を行った。

3. 主な結果と考察

集団凝集性尺度の下位尺度「ATG-S：社会的側面に対する個人的魅力」「ATG-T：課題的側面に対する個人的魅力」「GI-S：社会的側面に対する集団の一体感」と、心理的パフォーマンス CE において、J 大学の方が K 大学よりも得点が有意に高いことが確認された。今回の結果より集団凝集性と心理的競技能力には関連性があるという結果が示唆された。本研究で対象とした競技の野球は、集団競技に位置づけられる。そのため、選手個人で行動する場面と、チームのことを考えて行動する場面の両方が求められることから、集団凝集性と心理的パフォーマンス CE の得点が高かったと考えられる。また、J 大学の方が K 大学より心理的パフォーマンス CE の得点が高かったのは、J 大学と K 大学には、大学野球の組織体制や指導方針等に異なる点があると考える。

J 大学は、監督やコーチは学生から選出されている。一方で、K 大学は、れっきとした大人の監督、コーチが在任している。このように組織の運営体制に違いが大きくある。この違いを踏まえた上で、学生野球である J 大学は、学生自らが今自分に足りない力、今やらなければならない練習というものを考え、行動に移すことが多いため、集団凝集性と心理的パフォーマンス CE の平均値の得点が高かったのではないかと考える。

4. 結論

本研究によって明らかになったことは、①J 大学と K 大学の異なる野球環境において、集団凝集性と心理的パフォーマンス CE の得点は異なり、J 大学の方が K 大学より得点が高かった。②集団凝集性と心理的パフォーマンス CE の得点は、ポジションによって得点差に違いはない。③集団凝集性と心理的パフォーマンス CE の得点は、学年によって違いがある。社会的側面に対する個人的魅力、課題的側面に対する個人的魅力、社会的側面に対する集団の一体感において 4 年生の方が 1 年生より高いことが明らかになった。④J 大学において集団凝集性と心理的パフォーマンス CE の間には、正の相関関係がある。⑤K 大学において、集団凝集性と心理的パフォーマンス CE の間には、正の相関関係がある。

5. 卒業論文の執筆を終えて

昨年は、先輩方が卒業論文を一生懸命頑張っている姿を見て、自分たちも 1 年後は、卒業論文を書いているのかと思っていたあの時からもう 1 年が経ち、自分たちも卒業論文を書き終えた今時の流れの早さをとても感じた。

卒業論文は、しっかりと計画を立てて早め早めに行動することが大切だと感じた。頭では思っていても実際に行動に移すまでに時間がかかってしまったところがあったと感じている。しかし周りのゼミ員などと声を掛け合いながら共に頑張れたと思う。やはり卒業論文は 1 人では絶対に完成することができなかったととても感じる。周りの人にサポートしていただいたおかげで完成させることができた。周りのサポートしてくださった方々、仲間に感謝の気持ちを忘れずにこれからも頑張っていきたい。